猿新聞

編集・発行
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

群の広がり？ 個体調査

宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対協議会（以下協議会と表記）では、現在名張A・B群の個体調査を行っています。

個体調査は、群れや個体の正体を見極め適切な対策を行う上で重要な仕事です。

その地域に、どれだけのサルが生息できる自然が残されているかを把握することも、個体調査には含まれています。

サル的見地から見た生息域を見極めるのも大事なことです。

個体数の調整と被害防除対策は車の両輪のような関係で、両方のバランスがとれた管理体制が必要です。

サルは、シカやイノシシに比べ個体数は急激に増加しませんが、農作物に依存する群れでは増加率は高くなっています。

それに加え温暖化で、冬の寒さによる死亡率は低下し、全国的にサルは年々増える傾向にあると聞きますが、協議会での個体数調査の中間報告によると、名張A群では8頭増の総数43頭。名張B群では12頭減で総数38頭。

名張B群の2年間で12頭減少の要因は思い当たる節は見つかりません。

名張B群では、何か大きな異変が起きているのではないでしょうか？。

断定は出来ませんが、減少したと思われる20頭ほどが、居心地の良い新天地を求めて「群れ分かれ」したと云うことも考えられます。

個体調査を担当された近畿中国四国農業研究センターの山田　彩氏は、B群の現状を明らかにするために、追跡調査を行なっています。

調査は、地域住民の目撃情報を得ながら、平成26年3月頃まで継続される予定です。

是非、ご協力をお願いします。

平成25年度
個体調査中間報告。

名張A群
オトナオス　1頭
オトナメス　15頭
ワカモノオス　0頭
ワカモノメス　2頭
コドモ　19頭
アカンボウ　6頭

名張B群
オトナオス　2頭
オトナメス　11頭
ワカモノオス　1頭
ワカモノメス　2頭
コドモ　17頭
アカンボウ　5頭

平成24年度捕殺数
名張A群　5頭
名張B群　12頭

畦畔を崩すイノシシ

近頃、イノシシによる畦畔や溜池の法面、道路の法面、水路等の農業土木構造物の「掘越し被害」が急激に増加しています。山間部のみならず比較的平坦な所にまで「掘越し被害」が拡大傾向にあります。

畦畔や水路の保全は、圃場管理の内でも水稲栽培に欠かせない重要なことです。

水稲や大豆、野菜等の農作物被害も痛手ですが、農業土木構造物に及ぶ被害の方が労力的、金銭的にも一段と大きな痛手となります。

矢川付近でも、山際から離れた比較的平坦な所まで被害が及んでいます。

イノシシの食性は、雑食性で何でも食べますが、主に植物でクズ、ヤマイモ、チガヤなどの根茎や各種の葉、果実、ドングリなど。動物では昆虫類、ミミズ、カエルなどを食べ、そのほかに人間が食べるものはほとんど食べると考えてよいでしょう。

イノシシの食性を考慮した冬場の圃場管理が望まれます。

畦畔の草刈りは、こまめに行い冬場に青草を発生させないよう心がけましょう。

稲刈り後に耕起せず放置しておくと切り株から二番穂が登熟し、これらが晩秋から冬期にかけて、野生獣の餌場となります。稲刈り後も継続的に柵を設置するか、速やかに耕起するようにしましょう。

畦畔の保全には、ヒガンバナの植栽が効果があるそうです。ヒガンバナの球根には、獣類を寄せ付けない効果があると云われています。球根にはイノシシの餌となるミミズなど土壌動物の忌避作用があるようです。

ヒガンバナは草丈が低く草刈りは不要で、環境美化にもつながります。

是非一考を。

（写真＝被害の畦畔
ヒガンバナ植栽　矢川で）

移動図の活用

名張農林資源室では、月毎の猿の行動域を調査し季節的にどこを通りどこをよく利用しているかを、調べています。

この調査によって、特定地域における防除強化が、他地域への影響などを推測することができます。

継続的に行動域を調べることで、移動ルートの変化、出没回数など被害発生地域がどのように変化しているかが明らかになり、今後の対策に役立てることができます。

サルは好んで通過するルートを持っています。

それが解ることにより、今後の遊動域の変化の予測をしたりそのルートを分断することが可能になります。

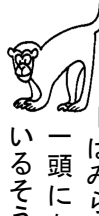
手間暇のかかる貴重なデーターです。

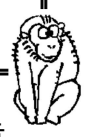
名張農林資源室は、広報などで開示しサル対策に反映さすべきです。

尚、名張市農林資源室の行動域調査（移動図）は名張鳥獣外問題連絡会HPで閲覧出来ます。

キーワード「名張鳥獣外問題連絡会」

サルの出没状況
名張A・B群





個体調査中間報告では、名張A群は横ばい状態で、B群では大幅な減少がみられます。

発信器B3装着のサルの周辺には、群れはみられずB3一頭になっているそうです。

名張B群では何か大きな異変が起きているのではないでしょうか？。

近畿中国四国農業研究センターの山田　彩氏は、B群の現状を明らかにするために、地域住民に目撃情報を求めています。

是非協力をお願いします。

指南員報告

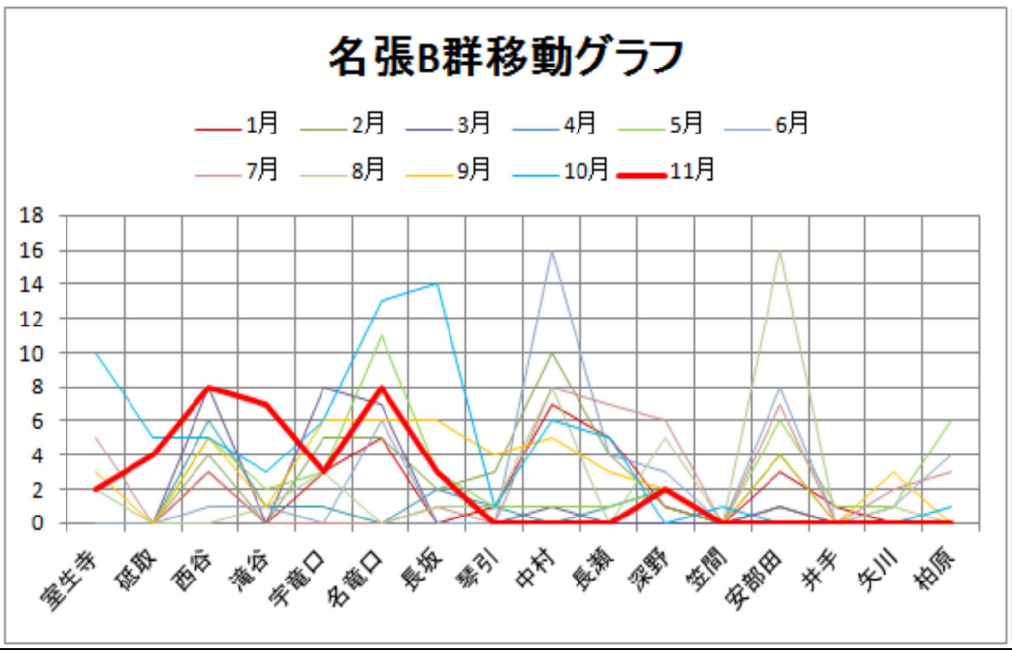
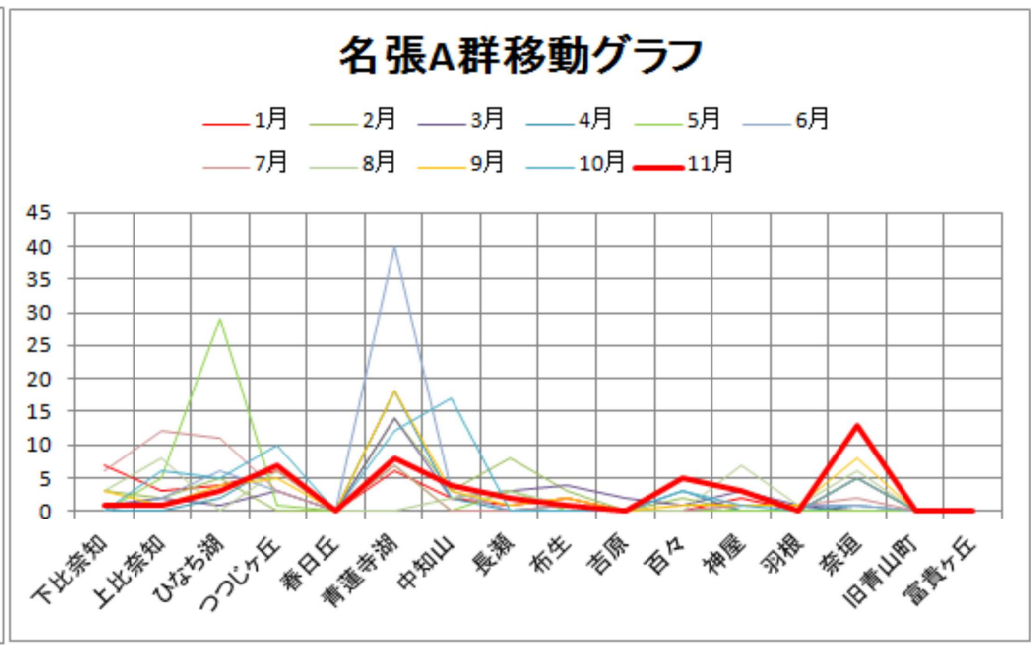
11月のサルの動向

A群は、先月は青蓮寺湖と比奈知湖で栗等が豊富にあったため往来が多かった。今月頃から食べ物少なくなり、移動範囲も狭く、柿の豊富な集落に集中し、被害の報告がよく聞かれる。

B群は、B1，2の群れが西谷、砥取、滝谷、大和龍口，伊賀竜口，赤目長坂、上三谷と国道165号線より南の地区に移動範囲が限られ、数日同じ集落へとどまる日が多い。又、個体数調査の結果、B3は受信のみで、目視が出来ない日が続いていたが、年老いて動きが鈍く、1頭のみ単独行動しているのを目撃している。

時々、B1，B2，の群れにB3の電波を受信。偶然に遭遇したのか？共に移動することがが確認されている。尚、先月より農作物被害の報告が多くなった。

「とれたて！なばり２０１３」が17日、名張市役所市民広場で開かれた。当日は恒例の『野生動物追い払い犬』（MD）の出演があり観客から労いの大きな拍手を浴びた。獣害が深刻化するなか、市民はMDの活動に注目し期待をしていることが、拍手の大きさで痛感した。

MD倶楽部は、『MDが守れる範囲には限界があり効果は局所的である。MDのいる地域にサルが出没しなくなっても、サルが活動エリアを移動しただけでは意味がない。地域全域に、帯状に配置するのが理想であるが頭数不足である』と…。

因みに、四期生として現在6頭を訓練育成中。